

指宿地域における縄文時代遺跡立地についての一考察

新垣 匠

1. はじめに

指宿市は薩摩半島の南端に位置し、約 120 か所の遺跡がある。約 3 万年前より指宿地域に人々が住んでいたと思われるが、縄文時代以降は南からの玄関口として、縄文時代より南島系遺物や関東系遺物が出土しており、北と南をつなぐ地域の 1 つであったと推測される。しかし、その遺跡立地については不明な点が多いため、縄文時代の各時期の遺跡分布状況を整理し、環境や社会背景に応じて遺跡の立地がどのように変遷していったのか遺跡の数が多い指宿地域を中心に考察したい¹。

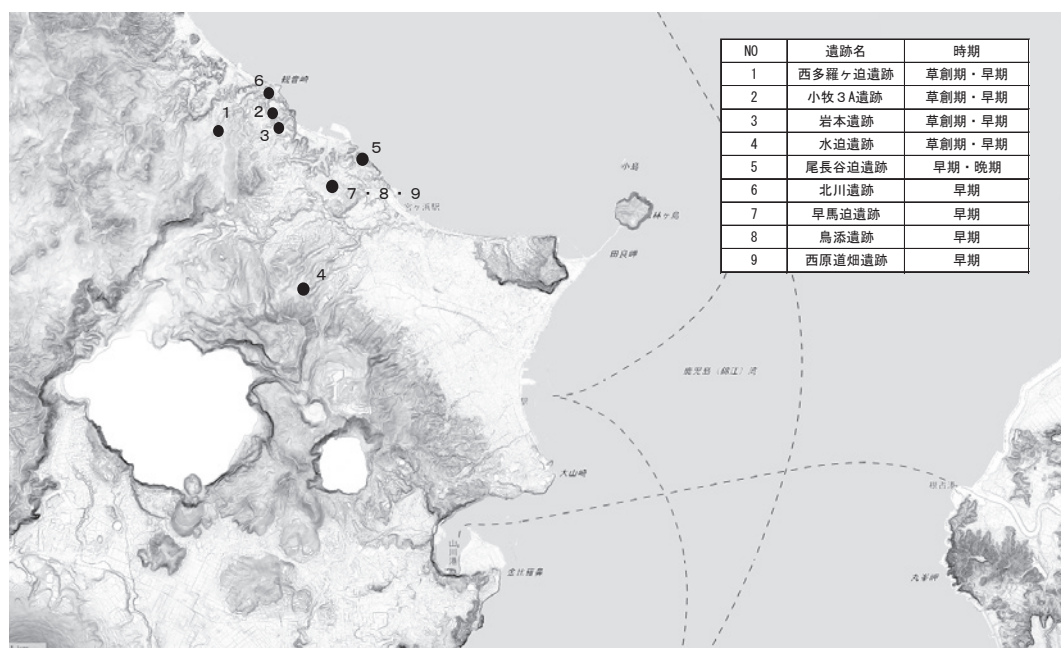
2. 縄文時代草創期～早期

縄文時代になると気候が温暖化し、南九州一帯は、列島に先駆けて豊かな森が発達したことが想定されている。そのため、南九州では全国に先駆けて豊かな縄文文化が開花する。

指宿地域の草創期の遺跡は、集落遺跡の先駆けとして著名な水迫遺跡をはじめ、無文土器が見つかる西多羅ヶ迫遺跡や隆帯文土器が見つかる岩本遺跡・小牧 3 A 遺跡の 4 遺跡が挙げられる。遺跡分布は、本地域北部の台地上にまとまっており、標高も全遺跡 60 m 以上である。水迫遺跡から出土した石器の残存デンプンを分析した渋谷綾子氏は、クリやコナラ属、オニグルミなどの堅果類、ワラビやクズなどの根茎類のデンプンが石器に付着していると考察しており、周辺の環境が照葉樹が広葉樹なのかは不明であるとしている（渋谷 2012）が、周辺は現在と同じように森林地帯であったと思われ、生息していた植物を加工していたと思われる。

草創期の遺跡観として堂込秀人氏は「狩猟・採集ばかりでの適地ではなく、生活素材の獲得・加工、それぞれのキャンプとの連携などのためにも選択されたのではないだろうか」としている（堂込 2019）。指宿地域の草創期の遺跡立地をみると 4 遺跡とも台地上の標高が高い地帯にあり、生活素材を調達しやすい場所でもあり、見晴らしの良い場所でもあるため、堂込氏の遺跡観と同様な立地をしているといえよう。

早期の遺跡は、草創期と同様に台地上に形成されている。霧島市上野原遺跡や鹿児島市加栗山遺跡



第 1 図 指宿地域の縄文時代草創期～早期の遺跡立地図

で集落跡が見つかっており、拠点的な集落が南九州一帯で確認され、これらの遺跡も台地上に形成されており、草創期と同様な遺跡立地を形成している。しかし、指宿地域では早期に伴う遺構は水迫遺跡の集石や舟形配石炉、落し穴、柱穴等のみであり、竪穴建物跡のような人が定着した痕跡は現段階では見つかっていない。尾長谷迫遺跡、早馬迫遺跡、鳥添遺跡、西原道畑遺跡では土器が確認されているだけである。そのため、全容は不明ではあるが、遺跡立地からみると草創期と同様に台地上を選んでいたと推測される。

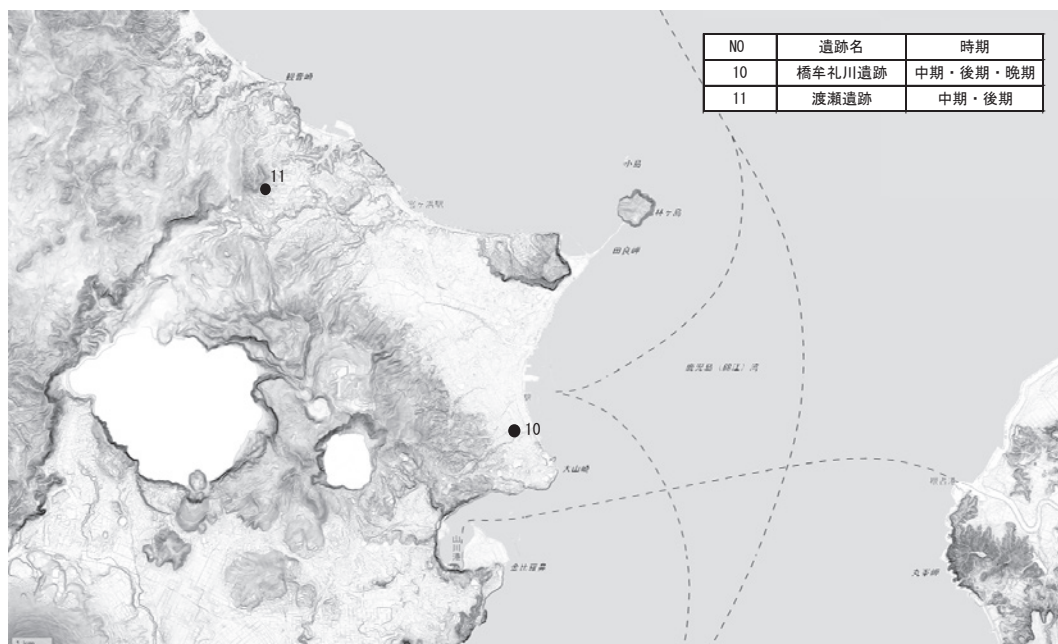
3. 縄文時代前期～中期

温暖な気候の恩恵を受け、いち早く縄文文化が成り立った南九州であったが、その栄華は長くは続かなかったと考えられる。その主な要因として考えられるのが、鬼界カルデラの噴火（約 7,300 年前）である。

鬼界カルデラは硫黄島と竹島を含むカルデラであり、噴火で生じた火砕流（幸屋火砕流）により、南九州一帯は壊滅的な被害を受けたと考えられている。また、指宿地域では、池田カルデラの噴火（約 6,300 年前）も発生し、その火砕流は場所によっては 20 m 近くあるなど、頻繁に火山活動の影響を受けている。そのため、現在まで指宿地域では縄文時代前期にあたる遺跡は確認されていない。

中期になると、橋牟礼川遺跡や渡瀬遺跡では阿高式土器が確認されているが、明確な遺構を伴う遺跡は確認されていない。特に橋牟礼川遺跡では、池田カルデラの火山性噴出物が厚く堆積していることが分かり、博物館建設に先立って行われた発掘調査では、地表面から約 5.5 m 下の深さで、池田カルデラ噴出物の二次堆積層が確認されている。そのため、指宿地域の沖積平野で、縄文時代中期以前の遺跡を確認するためには、厚く堆積した池田カルデラの火山性噴出物を除去しなければならないため、現実的には難しい状況である。

しかし、本市山川地域に所在する成川遺跡では、曽畑式土器が確認されており、池田カルデラの噴火前後に人々がやってきた痕跡は確認されているため、指宿地域の当該期である程度の遺跡があるということは否定できない。



第2図 指宿地域の縄文時代中期の遺跡立地図

4. 縄文時代後期～晩期

縄文時代後期・晩期になると、遺跡数が増えだし、台地上や火山性扇状地に分布するようになる。草創期・早期では遺跡が形成されていた場所が、標高も高く、台地上にあったのが、海岸に近い場所にも形成されるようになる。また、指宿地域北部では山間部の台地上に遺跡が分布していたのが、南部では海岸に近い海岸段丘上に遺跡が形成されるようになる。これは先述したように、池田カルデラの火山性噴出物の堆積状況による影響も考えられるが、注目すべき点である。

海岸付近に遺跡が形成される要因として市来式土器期以降の広域的な交流が考えられる。この時期の南九州では、屋久島・種子島でしか確認されていなかった南島系遺物が鹿児島県本土でも出土するようになり、大渡遺跡では尖底土器や南島との関連が示唆される注口土器、南摺ヶ浜遺跡では、宇宿上層式土器が確認されており、山間部ではなく、より交流がしやすい海岸部付近に遺跡が形成されていたと考えられる。

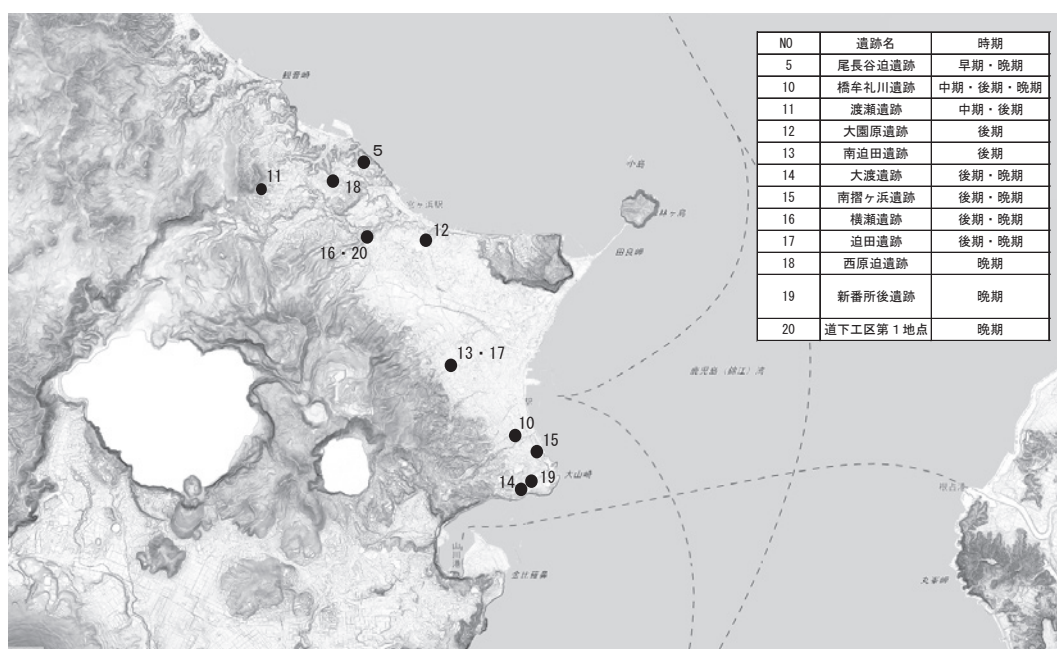
また、南島系遺物だけでなく、迫田遺跡では大洞式系土器が確認されており、本地域では、九州以北との交流も想定されている。大隅半島の当該期の遺跡立地は山間部が中心（板倉 2021）であり、種子島の遺跡立地は海岸部付近となっている（小脇 2019）。対岸にある大隅半島との様相が異なり、種子島との類似性が認められるのは、南島との交流の実態を考える一つの要素となるだろう。

5. まとめと課題

指宿地域における縄文時代の遺跡立地を分析した結果、草創期・早期の遺跡は山間部の台地上に形成され、前期・中期は池田カルデラの噴火の影響で遺跡数が激減するが、後期・晩期になると、海岸部の台地や扇状地にも遺跡が形成されるようになることが分かった。

これらの傾向は、山間部地帯で生活していた人々が、別の要因もあると推測されるが、その1つとして南島を含む遠方地域との交流のために、より海岸部付近で生活をするようになった結果と思われる。

今回の分析は遺跡立地から見た結果であり、遺物や遺構を含めた検討を行うことができなかったため、今後の課題としたい。



第3図 指宿地域の縄文時代後期～晩期の遺跡立地図

第 1 表 指宿地域の縄文時代の遺跡表

NO	遺跡名	時期	遺物	遺構	立地	標高 (m)
1	西多羅ヶ迫遺跡	草創期・早期	無文・水迫式・塞ノ神式土器	—	尾根上	103
2	小牧 3A 遺跡	草創期・早期	隆帯文・岩本式・前平式・吉田式	集石	台地上	65
3	岩本遺跡	草創期・早期	隆帯文・岩本式土器	—	台地上	63
4	水迫遺跡	草創期・早期	隆帯文・岩本式・水迫式	集石・舟形配石炉・落とし穴・柱穴	尾根上	126
5	尾長谷迫遺跡	早期・晩期	塞ノ神 A 式・黒川式 (浅鉢系) ?	—	台地上	40 ~ 50
6	北川遺跡	早期	貝殻文系	—	台地上	30
7	早馬迫遺跡	早期	塞ノ神 A 式	—	台地上	45
8	鳥添遺跡	早期	貝殻文系	—	台地上	64
9	西原道畑遺跡	早期	塞ノ神 A 式	—	台地上	33 ~ 43
10	橋牟礼川遺跡	中期・後期・晩期	阿高式・指宿式・市来式	ピット	扇状地	7 ~ 20
11	渡瀬遺跡	中期・後期	阿高式・指宿式・市来式・岩崎上層式	—	台地上	70
12	大園原遺跡	後期	市来式・指宿式・	—	台地上	25
13	南迫田遺跡	後期	指宿式 (攪乱)	—	扇状地	20
14	大渡遺跡	後期・晩期	面縄東洞式系土器・乳房状尖底・指宿式・市来式・北久根山式	人骨 2 体 (後期)	台地上	50
15	南摺ヶ浜遺跡	後期・晩期	宇宿上層式土器・上加世田式・入佐式・刻目突帯文・黒川式・石器・漁労具?	—	扇状地	8
16	横瀬遺跡	後期・晩期	岩崎上層式・入佐式・黒川式・夜臼式	—	台地	32
17	迫田遺跡	後期・晩期	大洞式系土器・黒川式系土器	—	扇状地	20
18	西原迫遺跡	晩期	夜臼式・黒色磨研	—	台地上	42 ~ 45
19	新番所後遺跡	晩期	上加世田式・入佐式・黒川式・刻目突帯文・扁平打製石斧、磨製石斧、石皿、叩石	—	扇状地	32
20	道下工区第 1 地点	晩期	岩崎上層式・入佐式・黒川式・夜臼式	—	台地上	46 ~ 52

【註】

1 鹿児島県立埋蔵文化財センター「埋蔵文化財情報データベース」(令和 5 年 2 月 20 日現在)を基準に報告書を参照した。なお、表採による周知の遺跡も、時代の特定できる遺跡に限り対象としているため、データベースに記載があり、本論にない遺跡もある。

参考文献

- 新垣 匠 2021「縄文時代の南薩地域における南島交流」『南島考古』第 40 号 沖縄考古学会 pp21-26
- 板倉 有太 2021 「九州南部縄文時代後・晩期の遺跡立地と遺構・石器組成」『原点回帰・南の考古学 前迫亮一代表還暦記念論集 南九州縄文通信 No. 23』 南九州縄文研究会 前迫亮一代表還暦記念論集刊行会 pp117-128
- 小脇 有希乃 2019「分布地図から見る種子島の遺跡考察」『鹿児島考古』第 49 号 鹿児島県考古学会 pp21-26
- 稲倉寛仁・成尾英仁・奥野充・小林哲夫 2014「南九州、池田火山の噴火史」『火山 第 59 巻 第 4 号』pp255 ~ 268
- 河野治雄 1958「第二編第一章 先史時代」『指宿市誌』pp33-104 指宿市役所
- 相美伊久雄 2014「琉球列島の九州縄文時代中期土器について」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』pp47-63 六一書房
- 渋谷綾子 2012 「鹿児島県水迫遺跡出土石器の残存デンプン粒と縄文時代草創期・早期における植物利用」『植生史研究』第 21 号 pp55-66
- 新東晃一 2007「南九州の初期縄文遺跡」『日本の考古学 上』株式会社 学生社
- 堂込秀人 2016「南西諸島の縄文時代後晩期の南北交流」『第 7 回 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表会資料集』pp 1-16 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
- 松崎大嗣・新垣匠・中摩浩太郎・鎌田洋昭 (編)『海をみつめた古代人～イブスキ人の起源～』指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ

※紙面の都合上、報告書は割愛させていただいた。ご了承ください。